

魚住洋一氏の業績

〈共編著〉

『戦争責任と「われわれ」——「歴史主体」論争をめぐる』、安彦一恵・魚住洋一・中岡成文編、ナカニシヤ出版、1997年。(このなかに、「国家と境界——国民とその〈外部〉」を収録、191-214頁)。

〈共 著〉

「感情と空間」、『岩波講座・哲学4 世界と意味』、岩波書店、1985年、259-284頁。

「感情——底なしの無意味さ」、『知の理論の現在』、丸山高司・小川侃・野家啓一編、世界思想社、1987年、62-80頁。

「現象学」、『哲学とは何か——その歴史と可能性』、竹市明弘・常俊宗三郎編、勁草書房、1988年、88-99頁。

「鏡と眼差し——自己意識の現象学のために」、『現象学の現在』、水野和久・新田義弘・常俊宗三郎編、世界思想社、1989年、131-149頁。

「毀れものとしての〈私〉——自己意識の政治学のために」、『他者の現象学・2』、新田義弘編、北斗出版、1992年、247-268頁。

「他者——レヴィナス、サルトルほか」、『現代哲学を学ぶ人のために』、丸山高司編、世界思想社、1992年、90-104頁。

「水族館」、『マイクロエシックス——小銭で払う倫理学』、川本隆史・須藤訓任・水谷雅彦・鷺田清一編、ナカニシヤ出版、1993年、94-97頁。

「そして誰も居なくなった——コギト・エルゴ・スムの彼方へ」、『岩波講座・現代思想14 近代／反近代』、新田義弘ほか編、岩波書店、1994年、91-124頁。

「気分と日常性——自然な自明性の喪失について」、『感性論——認識機械論としての美学の今日的課題』、岩城見一編、晃洋書房、1997年、54-71頁。

「フッサール——生活世界の復権」、『哲学を読む——考える愉しみのために』、大浦康介・富永茂樹・小林道夫編、人文書院、2000年、209-216頁。

「国民／民族——〈境界〉のポリティックス」、加茂直樹編、『社会哲学を学ぶ人のために』、世界思想社、2001年、284-296頁。

魚住洋一氏の業績、『倫理学論究』、vol. 4, no. 1, (2017), pp. 3-6.

「〈日本の制作〉——和辻哲郎の騙り」、『芸術／葛藤の現場——近代日本芸術思想のコンテキスト シリーズ・近代日本の知』、4巻、岩城見一編、晃洋書房、2002年、257-275頁。

〈論文〉

「事物・身体・大地——フッサールにおける自然の問題」、『理想』、562号、理想社、1980年、84-103頁。

「経験の開かれた弁証法」、『思想』、694号、岩波書店、1982年、58-74頁。

「自我と空間——超越論的現象学の極限」、『愛知』、1号、神戸哲学懇話会、1984年、45-56頁。

「経験の可能性あるいは不可能性について」、『象』、10号、京都市立芸術大学美術学部同窓会、1989年。

「^{マスカレード}仮面舞踏会のなかの〈私〉——サルトルと『聖ジュネ』をめぐって」、『情況』、9月号別冊「現象学——越境の現在」、情況出版、1992年、122-139頁。

「オナニストの夢想——現実と仮象の対位法のために」、『現象学年報』、8号、日本現象学会、1992年、83-97頁。

「幻視者の夢——われらがドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ」、『現象学年報』、13号、日本現象学会、1997年、17-34頁。

「ゼロの旅程——中ハシクシゲの“ZERO Project”」、中ハシクシゲ『ZERO Project # BII-124』、ZERO Project 委員会、2003年、30-49頁。

「メランコリーとしてのジェンダー——バトラーとフロイト」、『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』、51号、2009年、19-29頁。

「性的欲望とは何か？——現象学と概念分析」、『応用哲学会オンラインジャーナル Contemporary and Applied Philosophy』、vol. 1、応用哲学会、2009年、pp. 13-30.

「ホモセクシュアリティをめぐって——『社会構築主義・本質主義論争』の一側面」、『倫理学研究』、41号、関西倫理学会、2011年、137-148頁。

「同性愛者の『誕生』——アイデンティティとセクシュアリティ」、『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』、57号、2013年、5-18頁。

「偶像再興の旅——和辻哲郎の〈日本回帰〉」、『美術フォーラム』、28号、「特集 日本美術史はいかにつくられたか」、美術フォーラム21刊行会、2013年、64-68頁。

魚住洋一氏の業績、『倫理学論究』、vol. 4, no. 1, (2017), pp. 3-6.

「写真の狂気——ロラン・バルトと『温室の少女』、『象』、34号、京都市立芸術大学美術学部同窓会、2014年、30-39頁。

「世界のボリュームとしての奥行——メルロ＝ポンティと〈世界の誕生〉、『世界は黄色ハリハリ空間——奥行きを求めて』、京都市立芸術大学美術学部「奥行きの感覚」研究グループ、2014年、106-113頁。

「科学批判から「ミナマタ」へ——丸山徳次の哲学／倫理学、『龍谷哲学論集』、31号、龍谷哲学会、2017年、15-44頁。

「パリは燃えているか?——ドラッグ・クイーンたちへのレクイエム』、『龍谷大学論集』、489号、龍谷大学龍谷学会、2017年、1-36頁。

〈翻 訳〉

クレスゲス、U.、「フッサールの〈生活世界〉概念に含まれる二義性」、魚住洋一・鷺田清一訳、『現象学の根本問題』、新田義弘・小川侃編、晃洋書房、1978年、81-104頁。

ラントグレーベ、L.、「事実性と個体化」、魚住洋一・瀬島豊・常俊宗三郎訳、同上、183-205頁。

ロンバッハ、H.、「今日の現象学」、魚住洋一・渡部菊郎訳、同上、293-313頁。

シュミッツ、H.、「不安——雰囲気と身体の状態感」。魚住洋一訳、『身体と感情の現象学』、小川侃編、産業図書、1986年、95-122頁。

シュミッツ、H.、「時間経験の身体的源泉とアウグスティヌスの問題」、魚住洋一・品川哲彦訳、同上、191-216頁。

〈事典項目〉

『現象学事典』、岩波書店、1994年。このうち、「感覚与件」(71頁)、「感情」(77-78頁)、「幻像」(139-140頁)、「自我極／対象極」(167頁)、「体験」(304-305頁)、「雰囲気」(415頁)、「有体性」(453-454頁)を担当。

『現代倫理学事典』、弘文堂、2006年。このうち、「怒り」(28頁)、「感情／情操」(138-140頁)、「他者／他性」(577-579頁)、「笑い」(899頁)を担当。

〈文献目録・年表〉

「参考文献」、『現象学の根本問題』、新田義弘・小川侃編、晃洋書房、1978年、魚住洋一

魚住洋一氏の業績、『倫理学論究』、vol. 4, no. 1, (2017), pp. 3-6.

編纂、7-35 頁。

「文献一覧」、『講座・現象学』、4 卷、弘文堂、1980 年、池上哲司・魚住洋一・梅原賢一郎・気多雅子編纂、21-72 頁。

「哲学年表 哲学の現在 1868-1984——欧米の哲学と日本の哲学」、魚住洋一・平石隆敏編纂、『理想』、620 号、理想社、1985 年、16-48 頁。

なお、上記の業績のいくつかは魚住洋一氏のウェブサイトで読むことができる。URL：
<http://w3.kcu.ac.jp/~uozumi/>